

「日々の理科」(第1856号) 2019,-8,-8

「8月7日の浅間山の微噴火(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

8月7日の22時過ぎ、テレビの画面に衝撃のニュースが流れた。気象庁から発表された「噴火速報」は、以下のようなものだった。

火山名 浅間山 噴火速報
令和元年 8月 7日 22時10分 気象庁地震火山部発表
** (見出し) **
<浅間山で噴火が発生>
** (本文) **
浅間山で、令和元年8月7日22時08分頃、噴火が発生しました。

浅間山が噴火したのは、2015年6月の小噴火以来、約4年ぶりとなる。私はその時、北軽井沢の山荘(火口から東北東約9kmの地点)にいたが、音(鳴動)や振動(空振)はまったく感じなかった。庭から浅間の山頂が見えるので、すぐに庭に飛び出したが、夜間で視程も悪く、何も見えなかった。上記の気象庁発表のものは「浅間山が噴火した」という事実のみを報じるもので、どんな種類の噴火で、その程度の規模の噴火なのか、何も情報が得られなかった。

私の山荘の離れには、浅間山を常時監視するカメラが数台設置してあるが、その中のデジタル一眼レフの自動撮影カメラが、噴火の瞬間をとらえていた。



2019_0807_2208_30 / Kita-Karuizawa camera KB

視程が悪く、浅間山の稜線自体もうっすらとしか写っていないが、その右側(北側)火口壁が赤く光っている。稜線が出っ張っているところが「千トン岩」といって、1950年9月23日の噴火(爆発)で、火口から火口壁に着弾した火山岩塊である。このカメラは30秒ごとに1コマを、自動的に撮影・保存しているが、赤い噴出物が写っていたのは、この1枚だけであった。



2019_0807_2209_30 / Kita-Karuizawa camera KB

噴火から1分後の上の画像には、火口右側(北側)から、黒々と立ち上る噴煙が写っていた。



上の写真とほぼ同時刻、長野県土木部佐久建設事務所が黒斑山(浅間山の西側にあるピーク)に設置したカメラには、噴火1分後に立ち昇った、噴煙の全体像がはっきりと写っている。

通常、浅間山が噴火する前には、早ければ20日以上前から「火映現象」(かえいげんしょう)が観測されることが多い。しかし、今回の噴火ではそうした前兆現象は何も観測されず、ほぼいきなり噴火した。しかし噴火後は火口内が灼熱しているはずで、それが雲や噴煙に反映する火映が見えるはずである。私は早々に支度をして、浅間山北麓に撮影に出かけた。